

2008 年度

科目名 基礎薬理学	対象学科・学年 薬学部薬学科 2 回生	担当者 小山 豊
授業テーマ 医薬品の作用機構および体内での運命		
授業の概要と目標 医薬品がどのような機構でその薬効を示すのかを学ぶ“薬理学”は、薬剤師となるために、必ず身に付けなければならない分野です。「基礎薬理学」では、「医薬品の作用する過程を理解するために、代表的な薬物の作用、作用機序、および体内での運命に関する知識を修得すること」を、学習の一般目標とし、授業を進めます。 （日本薬学会モデルコアカリキュラム C13(1)「薬の作用と生体内運命」および、A(2)「医療の担い手としてのこのころ構え」C13(4)「薬物の臓器への到達と消失」、C15(3)「テーラーメイド薬物治療を目指して」の一部に対応）		
評価方法 授業への出席数、および期末時に課す試験の成績を評価の対象とします。また随時小テストを行い、各受講生の目標への到達度をフィードバックして行く予定です。		
テキスト 薬理学 - 医薬品の作用 -	著者 竹内 幸一 福井 裕行 栗原 順一 編	出版社 廣川書店
参考書 ・スタンダード薬学シリーズ 6 「薬と疾病 I」 ・New 薬理学	著者 日本薬学会 編 田中千賀子、加藤隆一	出版社 東京化学同人 南江堂
授業スケジュール・内容 以下に示す薬理学の基本項目に関する知識の修得を、各回の授業での到達目標とします。 1. 医薬品の使用に関する事故回避における、薬剤師の重要性を認識する。 薬物の用量と作用の関係を説明できる。 2. アゴニストとアンタゴニストについて説明できる。 3. 薬物の作用するしくみについて、受容体を例に挙げて説明できる。 4. 代表的な薬物受容体を列挙し、刺激あるいは阻害された場合の生理反応を説明できる。 5. 薬物の作用発現に関連する代表的な細胞内情報伝達系を列挙し、活性化された場合の生理反応を説明できる。 6. 薬物の作用するしくみについて、酵素およびチャネルを例に挙げて説明できる。 7. 薬物依存性について具体例を挙げて説明できる。 8. 薬物の主作用と副作用（有害作用）、毒性との関連について説明できる。 副作用と有害事象の違いについて説明できる。 9. 薬効に個人差が生じる要因を列挙できる。 薬物の作用発現に及ぼす代表的な遺伝的素因について、例を挙げて説明できる。 10. 代表的な薬物相互作用の機序について説明できる。 11. 薬効に起因する相互作用の代表的な例を挙げ、回避のための方法を説明できる。 12. 薬物の体内動態（吸収、分布、代謝、排泄）と薬効発現の関わりについて説明できる。 薬物の代表的な投与方法（剤形、投与経路）を列挙し、その意義を説明できる。 13. 経口投与された製剤が吸収されるまでに受ける変化（崩壊、分散、溶解など）を説明できる。 14. 薬物の生体内分布における循環系の重要性を説明できる。 15. 生体内の薬物の主要な排泄経路を、例を挙げて説明できる。		